

共産主義者同盟政治局

自動崩壊のに世界恐慌によって、革命情勢が成熟す

る。④ 或は政治斗争の基本基調を日帝の特異な侵略II反革命の貫徹形態を見落し、日帝、米帝の抗手と協調の両端を見落し、守保粉砕と日帝打倒を二重写しにし(守保粉砕II日帝打倒)を平板化してしまふ把握に到達する。

我々は若の単純自立説I革命的反抗斗争論的的傾向をレレーニン帝国主義説を継承しつゝ、帝国主義の膨張と危機対策の政策的畏困を過渡期世界の制約条件を踏え、克服してきた。だからその克服過程で、レーニン帝国主義の基本的普遍性を精算する傾向を逆に生み出した根拠は、帝国主義者の政策的動向や階級的斗争からの制約条件を、日帝が膨張し、侵略II反革命を開始することからを、亦一に説理的弱しにか明らかにしきれず、リアルな過程の把握の弱

さや、テンボ(市場再分割の深化の段階、IMF分析)の測定を明確化しきれていなかっただこと。亦一と論と運動論を区別し、同時にそれを遮断づけることとが弱く、二重写しに説ける傾向があったことに起因する。我々は現代帝国主義のIMF維持の政策的動向や過渡期世界に於ける三マロツクの階級斗争の即目的結合の制約条件をさちつゝ、日帝が侵略・反革命を増大させ、侵略II反革命戦争を展開せざるを得ないこと、決して現代帝国主義が市場再分割↓政治的軍事的分割の本質を喪失したわけではなく、かつ階級斗争の制約条件から帝国主義者が、侵略II反革命を回避しているわけでもないことを確認した上で、

亦一に日帝の侵略と反革命の具体的説理的な貫徹形態とそのメカニズム、及びそのテンポはどうか。亦二にその上にたつて日帝は如何なる革命的危機の性格と形態を生み出し、労働者人民はかゝる特殊な危機の性格や形態を媒介にして権力を形成するか。かつそれに向けては如何なる政治組織戦略を實現してゆかねばならぬかを射程に於て、若干の逆偏向を克服し、かつ10・21の政治組織方針を確定しなげればならぬ。

III 日帝の侵略反革命の具体的貫徹形態とそのメカニズム

二六△

(i) 永続的な全世界的侵略反革命戦争への発展の動向とそこから引き起される階級危機は、資本の過剰と不均等発展、市場再分割の激化を基礎に、かつ「労働者国家」の存在に規定された向進口武装解放

I. 我々の10・21斗争へのスローガン

同志諸君! 同盟政治局は10・21へ向け次のスローガンを決定した。

- 1. 自国帝国主義打倒、守保・NATO粉砕、ベトナム革命勝利の国際反帝統一戦線を創出強化せよ!
日帝打倒、守保粉砕の反帝統一戦線を創出強化せよ!
2. 日帝の海外派兵への道、日米反革命共同軍事行動の強化の70年守保粉砕!
3. 沖縄米軍等基地撤去、米軍政打倒、日帝のアジア侵略前線基地化阻止!
4. 一戸佐藤訪米実力阻止!
5. 自衛隊の帝国主義軍隊化粉砕、三月自衛隊の海外派兵、治安行動の演習粉砕!
6. 基地・反台・学園斗争の波を10・21に結合し、守保粉砕の巨波を作れ!
7. 10・21守保粉砕全口ストライキを勝ちとり、防衛政府中核を大衆的実力斗争で攻撃せよ!

II. 日帝の侵略II反革命の強化・日米反革命同盟の再編強化、70年守保粉砕の意義を把み、逆偏向を克服せよ!

同盟内に若の斗争の総括過程に加わりつゝ未だ単純自立説的傾向の補正把握とII革命的反抗斗争論IIの枠を抜けきつてない諸君がいる。特に学生同盟諸君がそうである。これ等の諸君は早急に総括を行う必要がある。また③説文や⑧月段階の総括段階にとどまり、総括の亦一段階の不十分性を固定し、同盟が全面的に路線転換したかの如く考えている諸君もいる。或いはかゝる新たな逆偏向に対し、II中核派と同じだ」と批判する極く正当な意見を生れ

ているくらいだ。即ち現代帝国主義の特徴や性格、過渡期世界の制約条件を徹底的に取り出すことに於て正当性を持ちなからず、そのことが行き過ぎせし不均等性や膨脹性を危れ去る傾向である。現代帝国主義の特殊性や過渡期世界の制約が、絶対的条件に

なつて、日帝の独自の侵略反革命の増大とそれによつて、日帝の独自の逆規制せんとする動向を欠落させ、いぜんとして、日帝主流が三木の如き、II軍事II米帝、日帝加担、至若II日帝IIなる路線を踏、

ているかの如き時代認識に帰させる傾向である。かゝる傾向からの危機の形態や性格は極端化すれ

ば、

日帝は膨張することか出来ず、危機を累積させ

ば、

日帝は膨張することか出来ず、危機を累積させ

斗争を条件に規定され、益々増大している。而独帝
国主義の資本の週利は三三〇諸国を制圧しつゝ、東
欧進出と東独併合をめぐり、非常事態法制定、国防
軍整備NATOの覇権の獲得へとつぎ動かして来た
が、今やチェコへのソ連軍侵入とワルシャワ軍との
緊張激化を媒介に、独自の核武装化を急ぎ、核拡散
防止条約調印見合せ、チェコへの介入を準備すべ
くNATO軍の結集、とりわけ米軍の増派を要求し、
かつ米帝国主義は在欧資本の防衛と而独帝国主義軍
制をめぐり、増派を決定したのである。欧州帝
国主義は再び対ソ連戦に向け内部調整を深めつゝ、N
ATO軍強化に結集し始めている。マルジョアジ
ー主流は、ドル世界通貨の防衛を通じ、市場再分割戦
への巻き返し、かつ対ソ、東欧、ヨーロッパ反革命、
ベトナム反革命の継続と朝鮮半島へのエスカレート
を画策し、米金融マルジョアジー主流は至消的、政
治的にかつ全世界的反革命戦線の盟主としての地位
を防衛し、巻き返しをはからんとしている。彼らは
助政インフレ政策で恐慌を回避しつゝ、統制至消へ
の移行を開始し、国内労働者人民への政治的抑圧と
合理化・収奪を一層強めることを決意したのであ
る。ニクソンにせよハンフリーにせよ、かゝる金融
マルジョアジーの代弁者である。米帝国主義は自ら
の資本週利を、ドル通貨を杆槓に、西欧、とりわけ
日本へ資本輸出を開始し、而独、日帝を世界反革命
戦線に組み込み、再編せんとして居る。米帝国主義
の死活を賭けた至消的巻き返しと同時に、世界全域
への反革命のエスカレートは、アジアのベトナムを
震源地とする武装解放斗争の波を、ラオス、フィリ
ピン、タイ、ビルマ、朝鮮半島へと波及し、至アジ
アの規模での革命と反革命戦争の拡大を鼓動させて
いる。とりわけ、朝鮮に於ける至消的危機と学生運
動の再燃、ゲリラ軍の登場、北朝鮮の近年武力併合の
宣言と38度線の緊張、米軍増派等の政治的不安定は
ホ二のベトナムの基盤を増大させつゝある。以上の
国際的動向の中で日米競争—アジア勢力圏獲得係
アジヤ革命抑圧、日本革命抑圧の恐るべき任務を沖
繩—70年安保に於て一挙に衝きつけられつゝある。
(1)65年日韓条約締結を核に韓台を勢力圏に治めつゝ、
インドネシアを扱手にアジア全域への勢力圏拡大を
進め、他方かゝる勢力圏形成を基礎にしての対米勝
張戦は、今や日帝をして死活的自己の生命線維持を
対米至勝利を貫徹すべく、国際、国内反革命の一挙
的發展から侵略・反革命戦争の推進の政治的軍事
的解決を展望させずにはおかなかったのである。と
りわけ朝鮮危機の開始は彼等に至消的に政治的にも
決定的な能躍をせしめ任務とするにはおかない。また
資本自由化のホ二段階への移行と米帝国主義との死

闘は、大企業の台同合併、一大合理化運動を開始せ
しめ、このままでの官公労合理化、中小企業整理統合
食糧危機—農民分断、大学、都市対策財政、インフ
レ政策等から統制至消への移行による危機の内政化
—累積的増大等に加え、より質の高い、全人民的危
機を成熟せしめつゝある。諸階級層の分断と流動は
日本帝国主義に世界市場再分割—アジア勢力圏獲得
—アジア—国内反革命、日米関係再編の戦略的一挙
的实现を迫っている。民間基幹労働者への合理化—
労働強化は対米競争—アジア侵出の激化に対して、
企業防衛—利益国防—アジア侵略、対米勝利、対米
関係勝利をJCI同盟—民社に要請し、右からの反
政府的突きあげとして、「労働者—有事駐留—自
主防衛」を宣言せしめ至消主義と非政治の路線から
これを脱するの政治的登場に迫りやうしている。他方
これ等の動向は民間労働者の離反を生み出さざるを
得ない。官公労の東交からの国防に始まり、全一
至電通—全一に波及する一連の大合理化は至消斗争
の昇揚と小市民的反抗斗争とした反政府的動向を拓
大させつゝある。官公労に於ては直接的に政府の国
際国内戦略の曖昧性が反戦、反米、反「反革命」と
して政治化せざるを得ないのである。中小零細、農
民、学生層の危機は今や構造的なものとなっている。
かくして70年前半の安保斗争と70年代前半に於て帝
国主義マルジョアジーは国際、国内反革命を、一体
的に一挙的に展開しつゝ、侵略—反革命戦争を開始せ
ざるを得ず、かつそれへの大胆な能躍を準備し始め
たのである。

(III) かかる事態は三木、前尾等を動搖させつつも佐藤一福田ラインは70年安保を先制的に突破することにより、国際一国内の一体的反革命↓侵略の反革命戦争の永続的推進をめぐり、また、我々すでに韓国や台湾からの米兵要請は事実である如く、自衛隊高級幕僚と防衛庁は三兵作戦↓治安行動草案、そして米兵3月自衛隊の三軍演習による海外派兵、治安演習を戦後始めて展開せんとしている。三次防を基礎に兵器の国産化、ミサイル、核武装体制を整備されている。一防自衛隊青年将校クラスによる戦前の開業軍の突出と国内クーデタ計画等の動向も開始されている。ASPAの侵略反革命会議化と日帝の主導権獲得、極東における、日米共同作戦を基礎とした、韓国軍、台湾軍との提携を通じた北朝鮮中共侵攻計画、シーボロン作戦、トルラン作戦等が、共同演習として繰り返されていたが、これ等は朝鮮危機の成熟を待つて、より切迫したものに后りつつある。日帝の侵略↓反革命の貫徹形態は、70年安保と70年代前半を通じて、アジアの危機、北中極東の危機に對して、米帝國主義の反革命戦争の展開を韓台の要請を背景に、好条件を名文にして、自衛隊の突出行動が日米共同作戦を通じて展開されつつ、一帯の全面的反対内外反革命戦争の開始へと発展せざるを得ない性格をもつものである。エンゾラ等連とエンゾラ事件に於ける政府と自衛隊の動向はかかる意味を鋭く突き出したのである。勿論かかる侵略と反革命の貫徹形態が、対外的要因から一帯に形成されるか、或いは国内階級斗争や過剰生産恐慌から形成されるかは別にしても、いずれにしても、極東の緊張を媒介にして、それを構造的な要因にこつと、革命と反革命の激動は展開拡大されるを得ない。以上の形態と性格を通じて、丁二同盟会議の動向、総評、公明党の分解社会党、日共の動向、しかも下からのファミズム運動、真正右翼の拍動等が、反革命別動隊として登場せざるを得ない。まさに9月6月を起點とし、70年代前半を形成する安保斗争の攻防は、永続的の国際国内反革命↓侵略反革命戦争の開始に連なり、他方このプロレタリア日本革命の客観的諸条件を成熟せしめる過程でもある。我々は自衛隊長路線と日帝の動向の側面からのみ捉えることは出来ない。安保条約そのものに限るならば、かかる日米共同作戦は何か条文化する必要はないし、第二次安保条約十分可能であり、むしろ、それ以上に、実際の反共機體、自衛隊の帝國主義軍政化、日米反革命共同作戦の諸条件の整備こそが必である。むしろ中絶が求むべき次第、策

文改正日程にのぼる性格である。又國民統合と対外的權威としての核こそが問題だ。核拡散防止条約に對する日帝の留保の動向をみよ、又、我々は核武装も臨戦作戦にこつては現用の長物であることも確認しておかねばならぬ。又一帯の米軍基地維持、ハトナム反革命担、エンゾラ等連に對する敵権力の意圖も、かかる実態の日帝の侵略、反革命の貫徹形態と性格の中での侵略反革命共同作戦との関連を把握されねばならぬ。

(VI) 安保斗争と我々の政治組織戦略

國際的、国内的危機の成熟過程に對し、國際一国内侵略、反革命抑圧の一体的一帯の進取から侵略、反革命戦争への永続的に推進する過程を内包して、この諸条件に對して、敵権力の、流動分解しつつある全階級、階層を再統合する要は何か。経済的には統制経済を敷きつつ、国内革命の左派、反共、空軍連を夫とすする戰鬥の大衆組織を粉砕していくことを發射点に、右翼、下からのファミズム、小ブル、ルンペン等の國民的台意をとりつつ、より大規模に社会党一総評の解体、日共の離任、公明党の分解、民社、丁二、同盟会議の変遷を促進させる政治過程を牽引し得る鍵は自衛隊の帝國主義軍隊化を攻防過程そのものに於て形成しつつ、かつ、國際国内日米反革命共同作戦を堅持しつつ、そのハゲモニーを日帝が掌握し、自衛隊帝國主義軍隊化を支援し、國民的台意を達成事実的に形成していくところこそ要がある。それ故敵権力にこつと、國際一国内反革命を唯一可能とする日米共同作戦を機軸にアジア太平洋諸國の反革命共同行動の堅持とその中の盟主的地位の確立を条件付けるべき極東の重層的な衝突衝動と自衛隊の帝國主義軍隊化(海外派兵、徴兵制、核武装)は決定的課題として登場するのである。これ等を基礎としてこそ統制経済の定着と新動組合の事実上の解体と國家機構への組み込み、制御小ブル、ルンペン、農民の統合は可能であり、(勿論一時の約束は)ファミズムの基礎を創出するのである。これ等のことは革命的左翼にこつと決意を要する。第一に基地撤去半親米軍政打倒日帝の侵略前線基地化阻止、自衛隊の帝國主義軍隊化阻止を機軸とする日帝の侵略反革命の強化と動向から、自衛隊の戰鬥的機軸が決定的機軸を有していることを意味している。かつ、かかる斗いに全ゆる階級斗争を集中し、対峙關係を作り出すことにより、のみ、政治危機一革命の危機の永続化を創出し、より根本的長期的な意味での日帝打倒、世界同時革命の展望と日本労働者人民をして世界プロレタリアに昇めるのである。第二に、日帝が侵略、反革命戦線の一環に位置し、日米反革命共同作戦を通じて、日本プロレタリアに對して、日米反革命共同作戦を基礎撤去、兵器の生産輸送拒否斗争として、近接の事態的解決斗争として斗争することによって、全世界の入口に於ける世界革命戦線を創出することになり、労働者人民を國際的に結ぶことになり、政府危機を促進せしめ、帝國主義者をこつと國際反

(C) ④のメローガンは、アツプリ優勝革命戦争への自任隊の入りだしをめぐり、海外派兵演習であり、かつ特殊保安防衛隊への駐在訓練として存在し、正に自任隊が日本赤軍の主要の略略を革命、国内抑圧の政治的支柱としてこの意義をもつて登場し、つあることを示している。以上より、我々の政治ベクトルと政治的結算の環は、④の内容に設定されねばならぬ。

⑤かかる政治結算をはかるべき、我々の運動組織的建設は、(D)の警備の下に、(E)として確定されねばならぬ。(D)のメローガンは、次のことを意味する。10.2に於ては、メブロソウの階級斗争が、ベトナム人民支援隊の即自的自衛反帝統一戦線を形成し、ちがらも、分解、再編過程にあるのに対し、我々を突破口にして、自内自の主要行、知保NATOの併呑、ベトナム革命勝利の世界反帝統一戦線に再編強化し、中核化ならぬこと、(E)言うまでもない。そして、(F)革命的左派被議を結成し、向け世界革命戦争、世界赤軍、世界党の路線を、国内、国内に定着化させねばならぬ。

⑥反帝統一戦線の基本は中央委議案及びフロア面15号として、現在の課題については本16号の口通刑稿参照

⑦のメローガンについて
 10.8以降の運動の傾向、形態を一般レベルで分析する組織は、中央戦動戦と佐世保、王子、成田諸基地に於ける諸階級の獨立形なままで、局地的、萌芽的暴力的登場、かつ反台、学園斗争の激化とその革命的左翼の未協約、急進市民主義潮流の登場と3次の分離、我々のA.S.P.A.C.斗争に於ける自内自主義行の必要性と、我々の全人民との結合、等口として特徴付けられる。

10.8以降の運動の傾向、形態を一般レベルで分析するには、より大規模な中央戦動戦の展開の保証と同時に、獨立形性を定形化し、個別斗争と政治斗争と結合し、大衆斗争と実力斗争と結合し、地区外生産実を基本に正規軍の徹底した組織化をテロに、政治ストライキ、マッセンス、ストライキによる至清斗争の政治斗争への統合、市民主義の包摂と分解、諸階級の統合による機動戦、陣地戦の基本形態を与えねばならぬ。このことは、4、6月の突出斗争を斗い抜いた部分が獨立し、運動の中心線に集約される危機に対して、我々も単純突出路線ではなく、突出斗争を前提にして、運動の尖端部を固めるところの、実力斗争と大衆斗争を結合するところの、基礎、反台、学園斗争を母体斗争に結合する種別的、主体的組織技術と運動形態を確立しねばならぬ。かくて、地区党の重層的配置、全口的建設と産別外編の整備を基礎に、基礎とした青年同盟の建設と地区反戦の戦場地区反戦の定着は、無盾の課題である。以上を解放、革マルが自らを二戦線と位置づけ、二階級主義、組織主義への屈服を産別反戦、地陣、戦方式へ転換したことを台せて考慮するならば、(F)のことは決定的である。

⑧のメローガンについて
 ①防衛政府中核への大衆的実力攻撃斗争の意、(A)三月自任隊演習をメドとする自任隊の海外派兵、国内反革命に對して、(B)諸基地斗争を自内自、自主打倒斗争に集約するものとして、(C)かつ、全世界の、とりわけ米人民のペンタゴン斗争に提携するものとして、鋭角的に我々の政治路線を突出し、自任隊の解体を戦略的にめざすものとして位置づけられねばならぬ。

(一) 同盟と統一戦線に関する諸課題

先のフロ通信No.15におりて、7回大会以後における同盟活動における諸欠陥と、その政治、組織論的実権を通し、その根柢の戦略内容を主体的に露明し、根本的に止揚する視卓と、具体的内容としての世界同時革命の目的反帝統一戦線の頂の等質性の獲得とその形成を、帝民主義列強同時打倒の一環としての自口帝民主義打倒の内容の現在の革命的意義とその基本的政策として、守保、NATOの粉碎、ベトナム革命勝利のスローガンに集約され、口際階級斗争の現局面における日本階級斗争の位置の確定を媒介に日帝打倒、日米反革命同盟粉碎(守保粉碎)の反帝統一戦線の創出、強化を、この秋から来年の佐藤新米阻止に向けた政治展望の基に緊急の往々として提起されなければならない。以上の基本的視卓を踏まえて、4中季における統一戦線問題に關する討説を整理しつゝ同盟の統一戦線の具体的政策、戦術を明確にしなければならない。

我が同盟は7回大会を旧れいり派との党派斗争を押し進める過程で、社民逆手説、すなわち突き上げ部隊説、左翼統一戦線、トロツキイ的政治力学の階級階級説等の自己否定的媒介にし、反帝統一戦線強化、再編を打ち出した極的意味とその弱点的限界性は、根本的に、斗いとるべき打倒対象、権力斗争との関連において統一戦線かどうえ、明確に位置づけられていなかった事を前提的問題としつゝ、同時に春の斗争の段階において、戦略論に運動説における、狭さもあり、諸党派の批判、評価を、政治路線上のみに限定され、その党派が存在している説理的立脚点の問題性に対する批判が現実的に依拠している階級的基盤の具体的把握を媒介せぬに、反帝統一戦線の主体的推進が、独善的傾向、小ブル主観主義的傾向を增大させていたのである。この争との根柢的問題は「説等の呼びかけに大ブルジョア幻想、政治過程論に立脚した、自然成長的党形成説」統一戦線党の形成の歴史的主体的限界性突破を、レーニンの党形成の出生(モデル的接近)、戦略、戦術の革命論を基幹とした党形成の経緯の過程が、下からの運動説を基幹とした統一戦線党形成の否定が統一戦線問題との二重写しの混乱が復合化されてきたところに立脚点的問題として總括をしなければならない。

同盟の反帝統一戦線の主体的推進の困難性の直面的問題は、具体的に7月反帝全学連大会に露された事を反省的に總括を行ない。

結果としての単独路線を、同盟の路線に戦術のま

るための押しつけの學理化傾向や、統一戦線問題を學なる党派力階級階級論に固定化したり、党派解体戦術のための統一戦線の自己目的化や、その裏返しとしての、党形成、階級形成をぬきの超党派的統一戦線のスラスラの形式的枠の統一戦線の思考等の傾向が、多かれ、少なかれ存在していた事を素直に認め、党派斗争を非政治的單純ゲバルト主義的解決ではなく、戦略的展望の基に計画された党派斗争を押し進める能力を同盟の基本的統一戦術の政策、戦術の根本的問題の提起はすでにフロ通信No.14及び中央委員会の討案にも提起されているごとく、70年守保粉碎、日帝打倒に向けて、具体的には来年一月、六月の佐藤新米の全人民的政治焦点に向けた反帝統一戦線の発展拡大を、12月革命的左翼守保協同討案、三月反帝全学連の拡大強化、全口地区反戦連合の形成の問題等を基本的にメルクマールとしての問題を確定した。

現状地区反戦の党派の系列化、東京地区反戦連絡協議会の機能マヒ、三派全学連の形式的実体的分解、すなわち战斗の大衆組織の分解状況と流動は、単なる大衆斗争機関次元において、具体的解決の糸口は創出できない現状を踏まて、上からの各党派を媒介とした政策協定を基幹に、下からの共同集會、行動の統一の実践的積みかさねを通し、日帝打倒、守保粉碎の戦列の強化を獲得していなければならない。

それを領導し、より大衆の战斗性を引き出し、諸党派を吸引して行く指導的党派への成長こそが我が同盟にかせられていりし、何より、それを統合するところの我々の総路線の広さと深さがより一層要求されるものであり、それを裏に答えることをぬぎにしてはありえない。さらにその総過程において同盟の階級的実践運動を媒介にした原則的党派斗争の展開、他党派の解体戦術を、タイナミックな大衆的実力斗争の推進の中でより一層押し進めなければならないものとしてある。

以上の根本的方向性の基に、この十月、十一月段階において、どこまで具体的実現を獲得できるのか、ある意味では同盟の提起した反帝統一戦線も単なる理念上の問題におわるのか、それとも現実的なものとして実体化する

の可否がわかれていたのである。

10・8問題をめぐり諸党派の動向と同盟の基本
田代度

日韓山争を契機として後退を余計なくされていた
此の潮流の運動は、砂川山争を契機に昨年の10・
8を突破口に新たな階級的流動と主体的に切り開い
たその階級的を再度確認し、すでに開始されてい
る70年代安保紛争と反帝山争の一大焦点として日本
革命の展望と主体的に構築し、革命の現実性の獲得
として、70年代前半に於ける階級山争の日本をロレ
タリヤ人民の国際的任務を鮮明にせよ、その政治的
象徴の環として来年度の佐藤訪米阻止山争に向いて
いかなる大衆的團結の構築と形勢を創出するか、先
づいて同盟は、この10・8集會を単なるスロレタリヤ
政工山崎君、革命政工ケバラの追悼集會のみに行わ
らざるを得なく、その死なばれをのりこえて、我
々の此の地平をより一歩、敵軍刀に肉迫して行く
大衆的意志の結晶の場として10・8集會を位置付け、
反帝統一戦線の実体的實現の端緒としてとらえ、愛
派主義の単純化路線を一歩止揚するものとして10・
8集會を圧倒的に成功させなければならぬ。以上
の10・8問題に対する政治的意識を確認の上で立ち
、積極的に取り組みを開始したのである。

9月14日、10・8救護会呼びかけのもとに10・8
に対する会談が開かれた。この会談において鮮明に
表現された事は、9・10の米タン、反合理化粉砕の
日比谷集會に政治的表現され且如く、解放派、革
派の社民の年の下での右翼的スロウクとして明確
に登場した、その延長的に10・8集會を統一、共同
の集會の方向性の努力に對して、中核派の6・15同
盟の集會破壊の自己批判をゆきにして、いっさいの
全学連、反政の発言を認めない事、革マル、SY両
派が主張し、さらにSYは 反帝全学連は破産した。
メントの反帝全学連委員長の発言をクレームをつけ
るといふ、共同集會を意識的破壊するべくトキメ
露骨に表現した。このように革マル派、解放派の動
向に對して、砂川現地反日同盟、三里塚現地反日同
盟の代表は、10・8救護会のカレールムが、SY派の
ハレンを愛派主義に對して、腹剛の批判を展開
され、解放派が動議し、革マル派が対応を変え、反
帝全学連の発言に對して保留する態度を取り、しか
し全体として発言とする事を決定し、後は集會を成
功させるという姿勢の基に解放派の組織内部を浸透
するといふ事に進められたのである、又現在の
東京反政の能力をヒして行る、具体的9・22、
10・6山争に何行て、東京反政の在野人会を固くと
いふ掌握のもとに発言を一本化するといふ事を確認
したのである。

また華女同中核派は、9月4日全国反政会談に於
いて中核系全国の地区反政フラインクを媒介し、
6・15同盟に對する、SY、革マル派の対応にハド
クを打ったが、法政の民青とのケハルトを合人反政
派山争を教化し、その山争山争が大衆的政策を媒介
展開ではなく、反又夕日反日更に外在化した階級的
視座を欠落した日民民青の武力侵略介入反対等とい
う心情的愛派主義的対応は、盛に此の民主的学生
運動に粉飾した日民、民青の東大、法政入集会的、
前線的にトロツキスト粉飾を、旧来の単なる愛、
中傷の展開が、愛連かつの、地区民青

をもフル動員し、ケハルトの軍事訓練をも行ない。
物議的発言をいともこぼしたのである。中核派は必死
の果敢で唯一の学生運動の拠点防衛をも、庄十の民
青の物資力の非に敗退を余計なくこれ、法政を放キ
止ざるを得ない状況に追い込まれたのである。とし
て一方革マルはSY派がアンチ中核スロウクの動向
愛派的な手取り返交として表われている。この事とは
彼らの社民との此の統一戦線と三派運動の分断に
なる、愛の左の山争の自己同心の拡大に純化さ
れ且軍路路線の二重性のつかいわけの困難性下直面
し、自らの同盟の危機を招いているのである。反政
、反帝派の大衆的自然発生性の高揚が、6・15に象
徴された社民の傘の下無媒介的な政策野合路線は、
参院選敗戦後、反政、反帝派の基本的スロウカンの
基に行なわれたら、15集會は、各派の小スールの利害
の対立を先行した結果生じたのであり、同盟は
6・15を単独集會を設定する事によって、同盟限前
の愛派状況に引き込まれることとなり、一定の愛派的
有利な条件を確保したのであるが、深定的とも言え
る、七日反帝全学連の同盟の指導力不足を歴々
最と愛派的に不利な位置をもたうしたのである。

同盟は、6・15同盟に對して愛派主義的立場にと
どまるのはなく、中核派の戦略的な統一戦線政策
をゆきにして秋山発言問題をいっさいの統一行動、
集會の唯一の基準に置くといふ、きわめて低い期限
の、彼れ

川その対応として、一時には軍事に決着をつけたが、このNo.2の事によつて問題は一向の解決でなく、中核派は組織、防衛史上に壊れぬ。たのである。この様な状況を反映して、党的多、状況の打破策として、日ソレバハの一定の接近として表現されてきた。

(三) 市民の分解と動搖に規定された革マル派、解放派の右翼プロットは何を意味するか、自稱水自身によつて、突出的の多いを展露して来たが、単なる戦術的問題の期限において、右翼的批判を行ない、解放派までが二敗地アルアの的に自己規定し両派が唯一の共通点は、旧日ソレバの階級を単なる小ブル急進主義であつたという結果現象的に清算して居るところにある。

10.8を突破口には日本階級斗争に直接的に介入して切り開いた階級の流動化は、屋宇連、反戦の国民的動員の斗いは、その斗いの激しいの懸持と、その拡大発展を修正しつつ常態化して行くことの困難性の実践的問題は、一般的改革目的にマニフェストでは、現実の階級斗争をつき動かす事ができないものとしてあるがゆえに革命の現実性の獲得を真剣に思ひ考すれば、気が遠くなる程と、最も主体的に担ひすればするほど党派の存在様式そのもの、とわれぬゆえに、計画的、系統性を持った斗いの組織化を媒介をゆきにゆきにいっさいの問題が、語りえないと云う段階に客観的にも突入して来た時点において、より一層、戦術的単なるラジカルな期限をえて、戦術的大胆自身が戦略的展望を要求する時点を、今日の階級斗争の場を規定しているのである。諸階級、階級の動向、分解過程の速度、それと統合する支障者階級の統治能力の喪失状況の中で、個別、特殊利害の欲え、化、非和的対立状況を正すため、この徹底化の延長上には展望を喪失し、斗いは分解し、小ブル的秩序は、人民戦線路線の枠に包圍されこまざる危険をばらみつつ、プロレタリア力斗争への口際的展望の基に統合する方向性に大衆の高度の自然発生性の明合、領導して行くこととの反動線一戦線の形成が死活的問題としてあるのである。

社会党大会の中断延期、社民内議院の介解、対立が、現在の階級情勢の反映と急速に促進されて来ている。この根本的要因は、高次のプロレタリアート人民の自然発生性を合法的議会主義路線の枠に算納できぬ多量の露呈であり、社会党大会の反映を受けて、九月二日、三日、四日にかけて行なわれる社会党大会は四ト口加入派、構改革、解放派、協会派の一部(向原派)の連合政権が予定されている。このことは、協会派内部における、対立は日共との共闘に改憲阻止青年行動委員会に固執する、太田一派と向原派が反改青年委員会に加入の方針を打ちたてる事とにより、対立が表面化され、構改革の対抗して全口反戦の指下的ヘリモノを意図しないし、それを口実にして、糾評組合青年部、地区労働を媒介に産別反戦の組織路線の定着化を計りつつして来ている。

また社会党加入派と四ト口派内部のより一層の分解が促進している。山形反戦の加入派から脱皮、及び三多反四ト口派(各ト派)の社会党から、総的決別し学生の本音運動隊主義と結合を強めようとしている。以上の諸動向の過程は、悉く革命的左派を基軸、一応の運動実体、形放をばか、てな地区反戦運動に対して右翼的抑えとシキと、分析をばか、るものとして本格的に登場して来る。社民の官僚制の枠に自己の党派の位置を確定しますます社民屈服路線を推進している樋口一派を中ぐす

る社会党解放派は、もはや社会党の限界にありて解放派としての独自活動の条件は、いっさい持ちえない段階に入つて居る。そのこゝでは社会党大会の運営委員は樋口の多前がてている事、最もその事を表現している。

解放派、この秋の斗争を米タン、反合斗争路線のもとに、9・10方式、すなわち、東京地評、青地協の単産立割の動員の基に、動向内部に一定の産別拠点を持つて居る革マル派と結合し、10.8以後、斗いつつてきた。全学連、反戦の運動の遺産を清算し、市民の余の將で、か運動を展開しえない問題を、プロレタリアートの本隊の結合とは、官僚的しめつけの抵抗を通して突発できるかごとの幻想を持ち、革命的組織化等と云う革命的言辭を語る事により、自らの社民の屈服路線をインペイしよとして居るのである。彼らのプロレタリアート本隊の結合と云うその内実は、まさしく東京地評やの総評民同の組合機関の代行的活用としてか、る事とまずにはつきりして居るのである。三派運動の清算を取捨する事によつて、その見返り条件として市民権と若干与えられることによつて党派的に延命を乞ふ

基地再編強化の一環としてとらえ、このどの闘争を展開した。問題は反戦平和主義に侵蝕された指導者、改良的移転運動、非战斗主義的請願運動、そして戦時的民族主義に傾斜してゆくのにたいして、これを自己防衛主義で打倒、その戦略的表現としての帝国主義軍隊の解体の基本方向において、革命的反戦運動として止揚するべきであった。こゝに介在するのが反帝統一戦線問題であったが、これが此はこの媒介を七〇年斗争における戦略的問題として運動論を一步前進せしめた地卓で集約しえずに至る各地の自然発生的高揚に対応することとなった。

C、世界党／各口党／地区党／革命的反権力運動

⑱ この間の階級斗争はソ連圏「社会主義口」における階級的流動として特徴的である。のみならずソ連圏諸口における階級情勢がソ連官僚による指導とその右翼偏向たる各口自由化官僚、文化人の指導をこえて発展する萌芽

をあげらかにした卓で特徴的である。

それはチエコへのワルシャワ軍介入時における人民の抵抗の組織化―非合法的形態から武装への転化、においてみられるだけにどまらず、ルーマニアにおいて、事態は労働者、人民階級の政治的疎外―非政治化として進展して行くことにもみられる。即ち自由化派官僚の政策展開が一口社会主義の内部から外在化する地卓でソ連圏IIコメコン経済とスターリン主義的世界政治の限界と衝突し、そこにおける階級的打倒がソ連官僚への屈服か多あつたな口際主義に基く全世界共産主義社会建設を一步さみみだすか、の問題として向われている。そこで一口自由化派官僚は前者の途をとること、後者の途をとることも出来ずには、言論統制等による人民への政治的抑圧につとめざるをえない。経済的「自由」と政治的抑圧はソ連官僚の介入をますます誘い、この諸口内における人民大衆の反抗があらたな政治的指導を追求しつゝ、着任する基礎を

もつてゐる。すでにポーランドにおいては共産党が、ゴムルカ集団への反抗を組織しつゝ、ある。

⑲ 過渡期世界における帝国主義の侵略／反革命とソ連口際的統一戦線への政治的指導の観念、そしてかゝる労働者口家諸口における戦時的、革命的人民との直接の直接の結合の裏からみて、我々が七回大会においてうちだした世界党建設の任務はますます重要なものとなつてゐる。だが当面われわれは日本における党建設を主軸に、かゝる世界党、インター建設の作業を8/3口際スルーアとの連携強化、口際的斗争指導の観念をまさに口際主義、口際的プロレタリアートの闘争、口際反帝統一戦線の独自の政治的観念の強化において展開しなげばならない。

⑳ すなわちこの任務をまつわが同盟の党建設強化の問題がとくにこの期間、死活的課題として向われた。その第一は同盟中央組織体制の問題である。

⑳ このつえにたつて、各地区党の任務を明確にしなげばならない。

各地区党は同盟の前線基地であり、それゆえに至る口際的統一的機能を除くすやての政治機能をもち、至る人民の規模での諸斗争を担わなければならない。たから地区党はたゞその地

括するものであつて、租税的向野も及なる親
 戚及び檢討しなければならず、たゞする租税
 主義の親戚と果る事。

② 町長に及なる租税主義の親戚は、この
 の政治的親戚を一般化した抽象として理解し
 たるから自己を除外する結果として租税の規
 定をいすれ、租税所収主義と運動主義の二
 人に動搖する結果をたらすものである。こ
 れに注意しなければならぬ。

③ 二以上の兵隊は、四中審判の主要親戚は
 七の軍用並に及に附する、これだけの語任
 務と建設をめぐるものとしてとらえればな
 らぬ。

即ちこれだけの力が平かな階級の安定の時期
 にあるならば、これだけの任務は一般民王主義
 的スローダウンのことに要求を及なす。(次ペ
 ージ上段中段より)



④ (次ページ上段中段より)
 二理論的にを詳明化し、またこれに附屬さ
 れてくる。租税的諸語句をここに集中し
 り、これの希望をいらすねばならぬ。町長
 甲隊は、並面は、21・11・10・12・10・10
 を準備する。兵隊をここに集中し、可能なら
 ば、これより早く、この白雲に商して、全四地区
 的討伐を施す。

四 青手同盟(反) 全四地区反 戦軍路(反) ニン

- ① 田中氏に及りては、兵隊を及らした青手同
 盟(反)の目標及び討伐方針。
- ② 兵隊上の一致を及らした。
- ③ 兵隊から同盟を及らした、兵隊を及らした
 青手反を及らした。
- ④ 地区ノ地区に租税を及らした。
- ⑤ 地区反戦ノ産別所研の租税的中核とな
 する。
- ⑥ 兵隊を及らした。兵隊を及らした。
- ⑦ 主要産別所研の青手同盟(反)は、地区
 一戦場の租税と租税ノ全四地区的討伐の二重

に租税を及らした。兵隊を及らした。
 を持たに当面(公)兵隊部隊に商して確認して(公
 する。

② 青手同盟の性格が政治同盟であり、その
 任務が及ら同盟の活動を助け、戦術的租税と
 して活動すること。これは、まだ十分な討伐が
 必要ならば、たゞ不値するものではないと考
 える。

③ 当面全四各地で兵隊的条件を檢討し、その
 ための討伐を租税し、兵隊を甲隊へ軍中して
 いた。兵隊を及らした。租税的条件がある地区では、
 兵隊に及らした。兵隊を及らした。兵隊を及らした。
 兵隊を及らした。兵隊を及らした。兵隊を及らした。

④ 全四地区反戦軍路(反)に及らした。
 の月、10月初旬に、これだけの影響を及ら
 する。全四地区反戦軍路の結果への準備として
 及ら同盟の及ら同盟を及らした。兵隊を及らした。
 兵隊を及らした。兵隊を及らした。兵隊を及らした。

IV 兵隊の反スロウ

- (一) 七の兵隊を及らした。兵隊を及らした。
- (二) 兵隊の反スロウを及らした。兵隊を及らした。
- (三) 兵隊の反スロウを及らした。兵隊を及らした。
- (四) 兵隊の反スロウを及らした。兵隊を及らした。
- (五) 兵隊の反スロウを及らした。兵隊を及らした。
- (六) 10・21 兵隊の反スロウを及らした。兵隊を及らした。
- (七) 9・22 兵隊の反スロウを及らした。兵隊を及らした。
- (八) 兵隊の反スロウを及らした。兵隊を及らした。

以上。